

一戦後の日本におけるアンフォルメル

島岡實は、強く心惹かれたスイスの風景や日本の山々などを描いた写実的な風景画で知られているが、そうした画風を確立する以前には、第二次世界大戦後のヨーロッパの抽象絵画に強く影響を受けていた。戦後、1950年代のヨーロッパでフランスを中心に展開された抽象絵画の動向にアンフォルメルがある。アンフォルメルとは、1952年、フランスの批評家 ミシェル・タピエによって名付けられた非定形 (informel) を志向した前衛芸術運動であり、ジャン・フォートリエ、ジャン・デュビュッフェ、ヴォルスを先駆として、物質感の強いマチエールや力動感にあふれた筆触と画面構成、幾何学的な定形の拒否などが特徴とされる。構成主義をはじめとする幾何学抽象の「冷たい抽象」に対し、アンフォルメルは「熱い抽象」と呼ばれ、その荒々しいマチエールには激しい情感が感じられる。島岡の《赤い花》からは、そうした「熱い抽象」を思わせる質感や熱量が伝わってくる。

アンフォルメルは1950年代後半に導入され、「世界・今日の美術展」(1956年、日本橋高島屋)を大きな契機として、日本の美術界に衝撃とともに受けとめられた。1957年にはタピエが来日し「世界・現代芸術展」を企画、フォートリエ、デュビュッフェ、ウィレム・デ・クーニング、ルーチョ・フォンタナ、ジョルジュ・マチュー、ジャクソン・ポロックなどの欧米作家に加えて、吉原治良、白髪

一雄、嶋本昭三、田中敦子ら具体美術協会の作家や勅使河原蒼風、福島秀子、今井俊満、堂本尚郎といった日本人作家も含めて構成された。こうして、1950年代後半から1960年代の日本においては、様々な分野でアンフォルメルの影響が見られたが、美術批評家たちによって、影響を受けた作品の多くが西洋の模倣であるという評価が拙速に下されたことで、戦後の前衛芸術、とりわけ抽象表現を試みた作家たちは1960年代に入り、なんらかの形でアンフォルメルを乗り越えていくという試練を与えられたのである。しかしながら、日本におけるアンフォルメルの影響は、絵画や彫刻のみならず、日本画、陶芸、生け花といった幅広いジャンルにおいて確実に刻み込まれており、島岡實の初期の作品も、その痕跡を留めている。